



## 研究論文 (Articles)

# 17世紀イングランドの子どもの死の物語における 宗教的・共同的読書実践と教育可能性の広がり

秋山 麻実

(山梨大学)

## Cooperative Religious Reading and Generalization of Educational Possibility in Death Bed Stories in Seventeenth-Century England

AKIYAMA Asami

(The University of Yamanashi)

This article aims at focusing on the relative, cooperative and mutual reading between dying children and their families, friends and communities depicted in children's death bed stories written for children in 17th century England. Such reading act supported children to learn Puritan way of belief through expressing and censoring their own feelings and emotions. They not only read the bible aloud, sang hymns and cried out for their sins, but also said amazingly godly words and cared for their families and their piety. Their godly actions were based on the supportive reading, praying and dialogue in families and communities and this relation was actually made the death bed stories to be those of educational texts for any children of Puritan.

本論文は、17世紀イングランドにおける子どもの死の物語における、家族、友人、コミュニティの关系的、協力的で相互的な宗教的読書行為と、死の教育の広がりに着目するものである。こうした読書のあり方は、子どもたちが感情を表現し、自身の感情や感覚を精査することを通して、ピューリタンとしての信仰を深め、死を迎えるまでの道程を支えるものである。子どもたちは聖書を大声で読んだり、聖歌を歌ったり、罪を思って泣いたりするだけでなく、驚くべき神のことばを話したり、家族やその信仰について心配したりもする。本論文は、かれらの敬虔な行動は、家族やコミュニティの読書や祈り、対話が支えており、この関係性が、子どもの死の物語がピューリタンの子どもたちの教育的テキストとなることを可能としたことを明らかにする。

**Key Words** : Death Education, Religious Education, History of Emotion, Children's Books, Puritan

キーワード：いのちの教育、宗教教育、感情の歴史、児童書、ピューリタン

### 1. はじめに

イングランドで最初に子どものために出版された書籍は、William Caxton (c.1422-1491) によって印刷された『きつねのレナード』(1484) や『イソップ物語』(1484) だった(三宅, 1995)<sup>1)</sup>。その後文字とキリスト教の教理問答、マナー、遺言書や手紙、借用書など実用文書作成の習得のための教科書の出版に続き、17世紀後半から子どもの死の物語を題材

とする、子どもの読み物が出版される。Thomas White (-c.1672) の著作『*A Little Book for Little Children* (小さな子どもたちのための小さな本)』(1660) を皮切りに、死の物語は、殉教者や聖人、聖書の登場人物だけでなく、普通の子どもの死の物語が作られた(秋山, 2014)<sup>2)</sup>。

当時、集会、説教や著述で人気を博していた非国教会派の牧師 James Janeway (1636-1674) による『*A Token for Children: Being an Exact Account of*

1) 三宅は、これらの著作から、イングランドにおける本の歴史の始まりを、絵本の歴史の始まりと見ることも可能だと指摘している。(三宅, 1995, p.145)

2) ここで「普通」という語が意味するのは、殉教者や聖人ではなく、読者と境遇が重なるかもしれないような、同時代の世俗の子どもである。

*Conversion, Holy and Exemplary Lives, and Joyful Deaths, of Several Young Children*（子どもの奇跡—小さな子どもたちの回心、信仰と模範的な生と喜びに満ちた死の詳細な物語—）（以下『*A Token for Children*』）は、1671年に出版の記録があるが、現在確認できる最古の版は1672年に出版された前半部分であり、後半を加えて出版されている1676年版の後半部分の版年は1673年とされ、その後19世紀に至るまで再版が続いた。これは普通の子どもの死の事例だけが編集されて、子ども用の読み物として出版されたものである。読者の対象年齢は明示されていないが、登場人物は2歳から14歳程度に分布している（秋山、2016）。ここで取り上げられている「普通の」子どもたちは、実在の子どもたちのように、生没年等が添えられていたり、著者の知人などとの関係が記されており、真偽のほどは不明であるが実在の子どものように言及されている。再版の多さに加えて、19世紀を通じて類似した死の床の子どもの物語の出版が続いたこと、またその多くが国教会もしくはプロテスタントの著作であることから、このテーマは、家庭における子どもの宗教教育の一翼を担うものとして、主にプロテスタントの文化のなかで発展したといえる<sup>3)</sup>。

こうした子どもの死の物語は、従来の児童文学や絵本の歴史研究のなかでは、宗教教育という目的のもと、悔悛と信仰によって幸福な死を迎えるという物語の構造の単調さと、史料の少なさから、あまり重視されて来なかった。しかしそのなかで Houlbrooke は、

3) 子どものための書籍の出版は、プロテスタント諸派の関係者が主として携わっており、また読書と信仰を結びつける傾向もそうした書籍のなかで散見される（秋山、2011および Avery and Briggs, 1989）。N. Smith は、カテキズム（教理問答）を基盤とした応答的な宗教教育が、プロテスタントの子どもの読み物において、信仰の深まりや死に向けた心の準備を確認する、大人と子どもの質問と答えという形式が引き継がれていることを指摘している（Smith, 1989, p.79）。しかしこのことをもって、家庭における子どもの宗教教育に対する関心の強さそのものが、カトリックとプロテスタントで異なっていたと結論づけることには慎重であるべきだろう。Seguin は、17世紀イングランドにおけるカトリックの女性たちの敬虔さについて論じるなかで、カトリックとプロテスタントの差異をステレオタイプに捉えることに対して注意をうながしており、どちらの女性たちにとっても、家庭における子どもの教育と宗教とは、ともに女性が責任を担うべき重要な役割であったことを指摘している（Seguin, 1997）。

『*A Token for Children*』について、Janewayの背景や13の物語の構造、登場人物の感情などについて整理を試みている。彼は、Janewayは死にゆく個人と神の恩寵の業を描くことに力点をおいており、死の床における社会あるいは家族の状況には焦点を当てないようにしていると解釈する（Houlbrooke, 1999, p.40）。しかし、Janewayが死の床における社会的関係に焦点を当てなかったとするこの説は、正しくない。後にみるように、『*A Token for Children*』およびその他の子どもに向けて書かれた死の物語は、家族と子どもたちの共同的な読書と祈りの実践を示すモデルであったといえる。

また Smith は、『*The Wise Virgin*（賢明な乙女）』と題された11歳の少女の記録について、神のこぼれを伝える預言者としての女性のイメージと、病床の少女のイメージの共通性が、信憑性を高め、人々の関心をかっしたことを指摘している（Smith, 1989）。一方 Whitmer はドイツのハレ大学において敬虔派の中心人物であった August Herman Frank (1663-1727) が推薦文を付し、ドイツでの出版と同年の1708年に英語訳出版された『*Early Piety Recommended in the Life and Death of Christlieb Leberecht von Exter*（クライストリーブ・リーベレヒト・フォン・エクスターの生と死に見る賞賛すべき早熟な信仰）』（Arends, 1708. 以下『*Early Piety*』）について、伝統的に預言が女性の神秘性と結びついてきたなかで、少年のジェンダー特性が、感情と知性を結び合わせるように働いたことを、ハレ大学周辺の敬虔派の政治的目論見と絡めて論じている（Whitmer, 2014）。

近年、プロテスタントの感情的営為についての研究が進む中で、死と子どもについての研究は再検討されつつある。Alec Ryrie は宗教革命期のプロテスタントの感情について、日記や自伝などを紐解きながら整理し、さらにそれらの感情のいくつかは子どものための死の物語にも適用されていることを検証している（Ryrie, A., 2013, 2017）。

これらの研究は、歴史学の成果を、子どもの死の物語の解釈に応用する傾向が強く、さまざまな示唆を与えてくれるものであるにせよ、子どもの死の物語が、どのように受容されることを想定して書かれていたかを明らかにするものではない。

本論文は、17世紀後半のピューリタンの宗教実践と、読書行為についての先行研究および、近年着目されている感情の歴史研究を参照しながら、子どもの死の物語のテキストを通じて、読書し、祈り、自らの感情や感覚、信仰の深まりを気にかけることが、どのように子どもに伝達されたのかを検討する。そして子どもの死の物語が、死にゆく預言者の記録の影響を色濃く残しながらも、保護者や家族、宗教的コミュニティと子どもとの関係のなかで、一般的な教育可能性、すなわち、広く平信徒の普通の子どもたちに死について教える可能性を示すものとして成立したことを明らかにする。

## 2. 子どもの死の物語における信仰モデル

子どもの死の物語の主たるねらいは、いつ訪れるかわからない死のために、子どもたちが学び、祈り、信仰を深めておくように促すことにあった(秋山 2010, p.174)。『*A Token for Children*』の著者 Janeway は、読者に向けたメッセージのなかで、「あなた方がまだ死ぬには幼すぎるといえるだろうか」と子どもたちに呼びかけ、いつでも幸福な死を遂げられるように準備していなければならないとする。

もっとも、Houlbrookeによれば、1650年から1699年の間のイングランドにおける子どもの死亡率は、1000人中1歳になる前に170人が死亡し、1-4歳では101.5人が死亡するのに対して、5-9歳では40人、10-14歳では24.2人であったことと比較すると、『*A Token for Children*』に登場する子どもたちは、信仰に目覚めるのが早くて2歳、死亡時期が5-14歳に分布しており、現実の子どもの死亡年齢よりも高く設定されている<sup>4)</sup>。このことは、信仰の目覚め、悔悛、苦悩を経て、確固たる信仰にたどり着くプロセスを表現するためには、成長した子どもたちをモデルにする必要があったためと推測できる。裏を返せば、信仰に目覚める前に死を迎える子どもたちの魂の行く末は、おおいに不安をもたらす問題であった。

『*A Token for Children*』に描かれる子どもたちは全部で13名であり、そのうち4人を除いたそれぞれ

れについて、生没年、名前、出身地などが記述されている。いわば死の床のドキュメンタリーのようなものである。

物語の構造は、子どもたちが健康な段階、病を得た段階、死の準備が完了した段階に分かれる。健康な段階から、総じて子どもたちは信心深く、敬虔である。ただし、親が宗教教育をしなかった者、物乞いをしてしながらさまざまな悪事に手を染めて育ってきた者が2名登場し、彼らは、教区の聖職者あるいは篤志家が彼らの宗教教育に着手するまで、信仰はない(Janeway, 1676, part 1, p.50, p.56)。

病を得て、死を意識するなかで、子どもたちは心から信仰しているかどうかを自問し、救いの確信が得られないことに苦しむ。しかし、祈りや断食、讃美歌を歌うことを通じて、次第に確信が得られ、死の前には、キリストのみにおいて、救済を信じ、喜んで死んでいくと宣言する。その死は「喜びの(joyful)死」「幸福な(happy)死」「勝利の(triumphant)死」と表現される。そのうち2人の子どもたちは死期を悟って人払いをし、4人の子どもたちは周囲の人々が驚くようなことばを伝えたり、法悦状態になって死ぬ。

肉体が健康な状態から病を得て死に至るのと並行して、幸福な死へと宗教的準備をするこれらの物語は、単純な構造に見えるけれども、その内には二つのモデルが混在している。

一つは、最初から驚くほどに信仰が篤く、神聖な法悦や、預言をもたらしかもしれない人物のモデルである。ピューリタンとカトリックとを問わず、殉教者や聖人の、完全な信仰における死の描写は、広く信仰のモデルだった。中世のカトリック世界においては、悪魔の誘惑に打ち勝つことが、魂を守るための死の床の課題であり、正しい死の技法(ars moriendi)を学ぶための理想のモデルが必要とされた。一方プロテスタントにおいては、個人の信仰を深めながらも、結局のところ救済を神の采配に委ねるが、だからこそ人々は、魂の救済の徴を探し求めた。また聖職者も平信徒も、葬送のさいの説教や、日記や自伝のなかで、故人の生前の信仰やふるまいが、魂が救済を望めるだけのものであったことを強

4) Houlbrooke, *Op.cit.*, p.39.

調した<sup>5)</sup>。『*A Token for Children*』では、多くの子どもたちは、健康である期間からすでに敬虔である。中には母親の胎内においてすでに神に捧げられていたとされる子どももいるし、言葉を話し始めると同時に敬虔なことを口にしたとされる子どももいる (Janeway, 1676, part 1, p.19, part 2, p.2)。説教を聞くのが好き、一人で熱心に祈る、奇妙な宗教的質問をする、両親に対して従順である、といった最初から敬虔で早熟な様子、死に瀕したときの痙攣や法悦、人々を驚かせることばが、このモデルの役割を果たす。

もう一つのモデルは、不信仰から回心へと至る過程のモデルである。聖職者が、人々の信仰を促すためには、聖人や殉教者でなくとも、罪を悔い改め、信仰に目覚めるように導かなければならない。読者の単なる興味と宗教的な関心があいまって、罪人の罪状と悔悛の過程、そして信仰を取り戻したうでの死という物語のパンフレットは、人々の心をつかんだ。Janewayは死刑囚の聴罪と祈りを行い、彼の来歴と悔悛の過程をパンフレットにして発行したが (Janeway, 1668)、1729年までに21回も再版したと推定される<sup>6)</sup>。罪を犯した後に悔悛によって「不名誉ではあっても幸せな死」を迎えるモデルもまた、歓迎されたのである。

『*A Token for Children*』では、特に初歩的な宗教教育を最初に受けなかった二人の子どもがこれを代表している。どのような境遇の子どもであっても、「幸せな死」を迎えることができるというモデルとして、彼らは機能している。しかしまたほかの子どもたちも、真の信仰にたどり着くために、自身の罪に気づいてむせび泣き、一人で、あるいは親に頼んで一緒に祈るといった過程を経て、救済を信じて死を迎えるに至る。彼らは皆、救済の確信が得られな

い不安なプロセスを経ており、そのためすべての子どもたちが、このモデルを踏襲することとなっている。

これを、子どもの死を描く他の文献と比較すると、『*A Token for Children*』が際立って、多様な子どもたちが「幸せな死」へと向かう姿を描き出していることがわかる。

Whiteによる『*A Little Book for Little Children*』は、Janewayが子どもの読者に向けて推薦している図書である。そのなかでは神学者オリゲネス (c.185-c.254)<sup>7)</sup>や、マカバイ記<sup>8)</sup>の7人兄弟の殉教の話とともに、読者と同様の普通の子どもの信仰と死の事例が2件、短い書簡の例が記述されている。ただしWhite自身が読者たる子どもたちに薦めているのは、殉教者物語やRichard Baxter (1615-1691)の冥想に関する著作であって、子どもの死の話ではない。また、これらの物語のほかは、著者の体験談や、宗教的あるいは道徳的な行動に関するアドヴァイスなどが含まれており、子どもの死の物語に特化した書籍ではない。

普通の子どもとして挙げられる登場人物は三人の少年たち、一人は8歳、一人は4歳、もう一人は5歳である。皆両親に対して従順であり、死後に何が起こるのかを心配している。8歳の子どもは、天使は罪を犯すのか、自分が死ぬときに母と一緒に来てくれるのかといった疑問を口にするなど、宗教的関心を持っている。また自身の小さな罪を数えて、地獄に落ちるかもしれないと泣く。これらの姿は『*A Token for Children*』の登場人物にも共通する場合が多いが、健康状態とは関係なく、子どもたちの属性として、いくつかの質問や感情表出が記述される。

同様にバプティスト派の聖職者Henry Jessey (1601-1663)とAbraham Chear (-1668)による『*A*

5) 説教の出版については枚挙に暇がないが、たとえばGouge (1688)は、Isaac Hubbardの葬送における説教とともに、本人の人物、信仰、会話、性格、死の様子、彼の死をもって学ばねばならないことについての論稿を編集している。

6) Greenは、当時の詳しい発行部数を得るのは困難であるため、代わりに再版数によって、ある書籍がどれだけポピュラーであったかをおしはかるという手法をとっている (Green, 2000, Appendix 1, Sample of Best-sellers and Steady Sellers First Published in England c. 1536-1700)。

7) 古代キリスト教の神学者。アレキサンドリアを拠点に活躍し、キリスト教思想の原点を確立した。著書に『諸原理について』(創文社、1978年)など。

8) 旧約聖書続編に含まれる文書のひとつ。紀元前167年から141年に起こったセレウコス朝シリアに対するユダヤ人の反乱から、ユダヤ人勢力ハスモン朝成立、ハヌカ祭のおこりへの流れとともに、殉教や神の恩寵について扱っている。7人兄弟のエピソードは、そうした殉教物語のひとつである。

*Looking Glass for Children* (子どもの鏡)』<sup>9)</sup>にも、本人もしくは父親の名前が明示された10歳と11歳の二人の少女の死の物語が掲載されているが、そのほかに著者の体験談や詩などで全体が構成されている。彼女たちの物語には、両親や姉妹、メイドなどとのやり取りが記述されている。少女たちはもともと華美を嫌ったり、罪に気づいてむせび泣くなど、敬虔な子どもの要素を備えている。とくに10歳で死亡したMary Warrenは、自身の死を前にして母を気遣う一方、食事や睡眠、薬を拒否して信仰に全面的に頼り、死を間近に控えて、自分のベッドの左右に神と悪魔がいるという伝統的な死の床のヴィジョンを語る。しかしそうであってもなお、二人とも信仰が不十分なのではないかという不安を訴える。

これらの本が、複数の子どもの死の物語を掲載しているのに対し、一人の子どもの記録が印刷されたものもある。『*Early Piety*』と『*The Life and Death of Jabez- Eliezer Russel, Son to William Russel, in the Parish of St. Bartholomew the Great* (聖バーソロミュー教区のウィリアム・ラッセル氏の息子ジェイベズ・エリーザー・ラッセルの生と死)』は、それぞれ一人の少年の死を扱ったものであり、子どもの読者を想定している(Russel, 1672)。Jabezは、信仰の不安を口にしたり、キリストを象徴するような夢を見たことを母に話したり、といった様子が、病気の進行に伴って描かれる。それに対し『*Early Piety*』の主人公Christliebについては、健康な時期からきょうだいたちに聖書を読んだり祈ることを勧めるなどの敬虔な生活ぶりが紹介されるが、描写の重心は彼の預言にある(Arends, 1708)。

*Early Piety*以上に、預言者としての描写に焦点を当てた著作も存在する。たとえば11歳のクウェーカーの少年Joseph Brigginsの死を描写した『*The Living Words of a Dying Child* (死にゆく子どもの生気にあふれたことば)』では、両親に対して従順であること、我慢強いこと、教えられることを学ぶ意欲があることなどの少年の性質が言及される

が、文章のほとんどは、彼が預言したということの証言で占められている(Anon., 1677)。それは、死んだ子ども自身の魂が救済されるのではないかという期待を人々の間に生むだけではなく、神の恩寵を目にし、耳にする特別の機会を与えるものでもあった。

『*The Wise Virgin*』の主人公Martha Hatfieldは、極度に衰弱しながらも最終的には病から回復するので、正確には死の床の子どもたちのなかには入らないが、彼女も同様にその預言を記録されている。彼女は病気の進行に伴って信仰の葛藤を口にすることはなく、描写はほとんど彼女の預言の内容を伝えることに終始する。預言は神の恩寵を直接に示すものであり、人々は驚きとともに喜びをもってそれを見届け、証言としてそれを書き、読んだ。さらに彼女の断食や祈りは、宗教的な薬として彼女の身体に良く作用する可能性があり、それもまた神の業として受け止められた(Smith, 1989)。

このように、当時の子どもの死の物語を数点概観すると、これらのなかに、敬虔で模範的で、時に説明のつかないような信仰へと到達するようなモデルとしての子ども像と、救済や深い信仰への不安を口にしながら、それを克服して死の時へと到達する子ども像が混在することがわかる。また、なかでも『*A Token for Children*』は、子どもたちの出自に幅を持たせ、多くの子どもの短い物語集として編集され、信仰と葛藤を渾然とさせながら潜り抜ける子どもたちのモデルを提供したといえることができる。

### 3. ピューリタニズムの感情表出と宗教的確信

カルヴァン派を中心とする、イングランド国教にラディカルな改革を求める勢力は、エリザベス1世治下に非国教化していく。ピューリタンと呼ばれたこの勢力は、教会の権力組織体系や儀式偏重を糾弾するとともに、読書と学びによる信仰を旨とした。彼らは国教を改革しピューリタンを国教に含める包含政策と、ピューリタンの自由な礼拝活動と信仰の自由を求める寛容政策、およびそれぞれを求める運動との間で、個人としても集団としても、その在り方を求めて国教からの離脱や、長老派と会衆派との

9) 『*A Looking-Glass for Children*』の初版は1672年とする説もあるが、現在確認できるのは1673年度版である(Marks, 2003, p.12)。

間の移動などを経験する（川分，2017，p.85, p.122, pp.128-129）。そのなかで、ピューリタニズムは読書や理性との結びつきを深めるのだが、Andrew Cambersはこの点を「まるで神が聖書のページを通して信者に直接語りかけるかのように、宗教改革の神学と図像学は、信仰をまるで印刷された書物を通してやってくるものであるかのように描いた」とし、ピューリタンにおいては、秘蹟<sup>10)</sup>やその他の道具を否定するために、その傾向が他のプロテスタントよりも強かったとしている（Cambers, 2011, p.2）。

読書行為と信仰のこの強い結びつきは、ピューリタンの信仰の核をなすものである。しかし、この結びつきに着目するあまり、現代の歴史研究は、ピューリタンあるいは広くプロテスタントに対する理解を固定的なものにしてきたという批判がある。カトリックが物理的な文化、すなわち礼拝儀式や教会装飾など身体に訴える特徴を持っていたのに対し、言語を通じて学び、信仰を深めていくプロテスタント、とりわけピューリタンは、より理性的であったと考えられ、その身体的、感情的な側面が見落とされてきたというのである（那須敬，2017年 pp.125-126）。

Alec Ryrieは、こうした見地から、愛（affection, love）、心の固さ（hardness）と冷たさ（coldness, deadness）<sup>11)</sup>といったキーワードに着目し、プロテスタントにとって感情（affection）は信仰の支えとなっていて、反対に感情が動かされず、神への愛や神の愛を感じられない状態を心の固さ、冷たさ、乾き、重さなどさまざまなかたちで表現したと分析する。

10) 神の恩寵を表象するしるしとして教会あるいは聖職者から施される儀礼のことで、sacramentの訳。宗派によって意味づけや儀式が異なるが、カトリックでは7つの秘蹟が設定されているのに対し、プロテスタントは聖書に基づいて信仰のあり方を見直し、「洗礼」と「聖餐」のみを認める。なお日本語訳では通常、カトリックでは「秘蹟」、プロテスタントでは「礼典」とされる。

11) これらはピューリタン、イングランド国教徒、カトリックのすべてに共通する感覚であり、古代の地水火風四元素に基づく感覚的かつ感情的な精神の捉え方である（Ryrie, 2013, p.22）。なお、Ryrieの立場は、1640年代までは多くのプロテスタントがピューリタンでありかつ国教徒であったとし、宗教改革期について論じる限り使用可能な用語はプロテスタントであるとしている（Ryrie, 2013, p.8）。

カルヴァン派を中心とした予定説では、死後の魂が救済されるかどうかは、人間の営為ではなく神の摂理によって決定される。Ryrieによれば、プロテスタントにとって感覚（feeling）や感情は、神が聖書以外で、それを通じて直接語りかけてくる場であり、だからこそプロテスタントは、その宗教実践として、自身の感覚や感情の状態を常に気にかけていたという。自身の心の固さを感知し、その固さは信仰が深まるほどに増しても、その苦しさには耐えながら、いつか心が溶けて柔らかくなり神への愛を抱き、神の愛を感じられるようになる日を待ち望むことが、プロテスタントの信仰の深まりのプロセスであった。その変化をもたらすのは神の恩寵であり、何か圧倒的で、説明のつかないことや、神への愛が沸き起こってくることを経験されると考えられていた。その経験は、信仰を深めるのを助けてくれるはずであった（Ryrie, 2013, p.42）。

したがって自らの心の固さを嘆き、自身の罪に慄き、圧倒され、悔悛し、絶望（despair）を通して神の摂理であるところの救済の確信（assurance）へと至ることが、プロテスタントの信仰の深まりのイメージだった（Ryrie, 2013, p.35）。宗教的な読書行為は、こうしたプロテスタントの信仰の論理に則り、読書行為を通じて自身の感情や感覚を観察する行為であったのだが（Ryrie, 2013, p.46）、それについては後述するとして、ここでは子どもの死の物語が、この信仰と感情の論理と符合する点をいくつかもつということを確認しておきたい。

ピューリタン文化との符合は、多くの死にゆく子どもたちの言動に見られる。第一に彼らは、神との関係に対する感情や感性、感受性を持つ者として描かれる。たとえば『*A Token for Children*』の第2例の子どもは5—6歳で亡くなるが、その前に聖書を読めるようになると、畏敬の念（reverence）と穏やかな感情（tenderness）をもって読む。またそうした感受性は、神やキリストとの結びつきを、人間同士の関係にあてはまる感覚的なことばで表現するというかたちで表現される。たとえば第7例の少年は、9歳で死ぬ直前に、「すべてうまくいく。うまく引き合わされた。キリストは求め、僕も求める」「いまやキリストは僕のもので、僕は永遠に彼のものだ」と

言う。一方、第10例の8-9歳で死亡したと推定される少女は、神を愛することができない、なぜなら「見たこともない人を愛することはできない」からだと言う (Janeway, 1676, part 1, p.21, p.70, part 2, p.20)。

第二に、彼らは感情を表出する存在として描かれ、特に泣くという表現は頻出する。彼らは自分の罪に慄き、あるいは死後のことを考え、また時には信仰を深めて泣く。たとえば前出の第2例の少年は、聖書を大声で読みながら、あるいは祈りながらむせび泣く。第3例の少女は4-5歳で信仰に目覚め、「あの世で何が起こるかを考えて苦い涙を流す」。第4例の少女は、笑って過ごすよりも泣くことが重要と言い、第6例の少年は、自分は天の父にすべてを委ねるし、すべての信用を置いていると告白しながら泣く。第7例の少年は、教育を受けると「自分の悪い生活について泣き、嘆く」ようになる。また「苦しそうに大声で泣き」「どうしたらいいのだろうか？僕は哀れな罪人で、地獄に行くのが怖い」と言う (Janeway, 1676, part 1, p.21, p.27, p.41, pp.54-55, p.62)。彼らの信仰の目覚めは、涙に彩られているといっても過言ではない。

第三に、確信は、子どもたちにとって重要な死の準備である。彼らは救済への確信が得られない状態から、神にすべて委ねる状態へと移行する。『*A Looking Glass for Children*』のMary Warrenは、5-6歳の頃には美しい服を見て傲慢の罪を感じて泣くような敬虔な少女だが<sup>12)</sup>、聖書の句の意味がわからないと言ってすすり泣くというように、信仰に確信が持てない姿が描かれる。しかし彼女の死が近づいてくると、母親に「死を望むか」と聞かれて「はい、心から」と答え、「キリストの血は十分に私の罪を贖ってくれると知っているから」と付け加える。そして、母親が泣いていると、「お母さん泣かないで、神に私をお任せして、神の喜ばれる通りにされるようにして」とむしろ慰める (Jessey and Chear, 1673, pp.9-10)。つまり、確信や信仰の持てない苦しい時期を通して、最後に確信を得るのである。

第四に、彼らはしばしば説明のつかない経験をす。上述のMary Warrenは、確信を得た後は、「私は、黙っている時には、喜び (joy) と嬉しさ (gladness) のあまり、それを表現できないのです」と話す (Jessey, and Chear, 1673, p.13)。説明のつかない経験自体が、子どもたちの魂が神の恩寵によって救済される予兆としてうけとめられるというピューリタンの信仰の文脈に沿って、死にゆく子どもたちの経験は構成される。

このように、物語の中の死にゆく子どもたちは、ピューリタン文化のなかで感情の動きを表出しながら、絶望から確信へという道をたどる。つまり死にゆく子どもたちの姿は、ピューリタンの信仰の道筋のイメージそのものを現している。

ところで、そもそもこのピューリタンの宗教実践モデルと死にゆく子どもたちの描写の一致は、偶然ではない。というのも、子どもの死の物語の著者の多くは、非国教の聖職者であったからである。Janewayはオクスフォード大学のクライストチャーチ・カレッジで学んだが、1662年信仰統一法において、国教の一般祈祷書に従うという規定に反し追放牧師となった約2000名の中に入っており、1665年のペスト流行の際には、国教の教区牧師が地方に避難するなか、ロンドンに残って礼拝や救済を行った新教非国教牧師の一員であったことが判っている (川分, 2017年, p.125)。BaxterやEdmund Calamy (1600-1666)との親交の深さから、長老派牧師であったことが推測できる。また『*The Wise Virgin*』を著したFisherは、シェフィールドで最初の長老派教会を設立した人物である。『*A Little Book for Little Children*』の作者Whiteも長老派牧師であり、『*A Looking-Glass for Children*』の著者JesseyとChearも、それぞれ分離派ジャコバイトと洗礼派であった。もともと、作者や登場人物の宗派がはっきりしない作品や、クウェーカーの作品もあり、子どもの死の物語群の作者を一概にピューリタンということはできないが<sup>13)</sup>、

12) キリスト教の文脈において、衣服は特に傲慢の現れと解釈される。その根底には、失樂園のエピソードがあり、罪を思い起こし悔悛するために与えられた服を、目を楽しませることに用いることは冒瀆であると解釈される (米村, 2009, pp.186-187)。

13) たとえば『*The Life and Death of Jabez- Eliezer Russel*』は、教区教会で洗礼を受けたこと以外、家族の宗派についての言及はない (Russel, 1672)。また『*The Living Words of a Dying Child*』は、クウェーカーの家族とコミュニティによって書かれた、死を前にした子どもの預言の証言である。

少なくとも文化としてのピューリタニズムを共有していたとみることができる。

#### 4. ピューリタンの読書行為における個別性と共同性

前節で触れたように、ピューリタンの文化において、読書行為が特別な価値を持っていた。読書と信仰の結びつきについて、Cambersは、特に興味深い2点を指摘している。

1点目は、ピューリタンの読書行為は、彼らのアイデンティティの確立と結びついていたとする点である。宗教改革から名誉革命へと至る過程で、ピューリタンは、イングランド国教会の神学的、組織的狀態に不満を抱き、改革を目指しながらも、それはかなわなかった。それどころか、1662年の信仰統一法による聖職者の非国教化に代表されるように、長老派、会衆派、その他分離派等のさまざまな立場の人々が、ピューリタンとして析出することとなった。そうしたピューリタン内部の多様性に加えて、非国教徒への取り締まりの強化や緩和が繰り返されるなかで、ピューリタンは自分たちを迫害されたマイノリティとして考えていた。これらの要素は、自分たちのアイデンティティの確立へとピューリタンを向かわせた。Cambersは、「読むことはピューリタンの命」であり、「社会的実践として人々を結び付け、ピューリタンでない人と自分たちとを分け離す」行為であったと指摘する（Cambers, 2011, p.7）。アイデンティティの確立は、他との区別であると同時に、そのものの本質的な何かを要請する。Cambersの指摘に従うならば、ピューリタンにはその信仰に即した読書実践があり、それが人々を他から区別すると同時に、ピューリタンのアイデンティティとしての信仰そのものと深くかかわっていたことになる。

2点目は、まさにこの点から派生する。ピューリタンにとって読む行為は、個人的・個別的な側面と共同的な側面を持つことを意味した。Cambersは、読書が社会的実践であったという文章に続けて、読書が「聖霊と会うための実践的手段であり、自分の救済の確認を可能にする手段でもある」と指摘する（Cambers, 2011, p.7, p.13）。自分の救済を確信する

ためには、本に書かれていることと自分の生活を照らし合わせて顧みたり、自分の感情の動きを子細に見つめて恩寵と救済への道を閉ざしていないか、あるいは開かれる予兆はないかと配慮したりしなければならない。これは、Ryrieの指摘した感情や感覚、心の状態を常に気にかける宗教実践が、読書行為を通じても行われていたことを意味している。これは個人的になされなければならない行為である。一方、家族や学校生活においては友人などと読書や祈りを共にすることは、社会的、共同的に成立する行為であり、これをもってこそ集団的アイデンティティを求めることができる。

このことを、Cambersはさらに、読書が行われた物理的な空間を調査することによって論じているが、それはクローゼットと呼ばれる小部屋、寝室、書斎、客間、台所、図書室といった個人宅内ばかりでなく、図書館、コーヒーハウス、教会、牢獄などへと広がっており、常に宗教的読書は祈りや他者との語らいと結びついている。

そのうちクローゼットについての考察では、極めて個人的な、自身を感情や感覚を振り返るにあたって、時に人々はクローゼットで本を読み、本の余白に思いを書き込み、祈ったと指摘している。クローゼットは比較的個人的な読書や祈りを可能にする場所だが、時にはそこが共同的な読書や祈りが行われる場所ともなったという。なぜなら母親たちはしばしば、幼い子どもを伴って小部屋に入り、本を読み聞かせ、共に祈っていたからである（Cambers, 2011, p.47）。このことは、読書行為が大人と子どもを結ぶものであり、読書を挟んでともに祈り、学び、考え、信仰を深めながら、やがて独立して祈り、読み、自身の感情や感覚を精査するというピューリタンの信仰実践へと手離していく営為の一助として、本があったことを意味する。

クローゼットだけでなく寝室もまた、そうした個人的かつ共同的な読書の場であった。寝室は独りになれる場である場合とそうでない場合があり、Cambersは、Baxterや当時有名なピューリタン殉教者であったChristopher Love (1618-1651)の自伝を引用しながら、寝室において友人と共に読み、祈る経験が珍しくはないことを指摘している（Cambers,

2011, p.57)。

通常、ピューリタンにとって読むことは、自身の感情や感覚、信仰をふりかえり、祈りや瞑想、時には本への書き込みなどを行う個人的な行為と捉えられることが多い。メディテーションのための宗教書は、聖書の章句とそれをどのように捉えるべきかについて書かれているし、こうした読書は個人の信仰のための行為のようにみえる。しかし Cambers の研究は、彼らが物理的に場所を共有し、共に読書や祈りを行ったことを明らかにしている。

ところで読書行為が個人的に行われる場合でさえ、ピューリタンの宗教的な読書には、本のなかに語りかける声があり、本と自身とを対話させる要素があった。たとえば説教を収録した出版物は当時人気があったが、そこには読者に語りかける言葉が多い。シャルティエとカヴァッロは、1547年にイングランドで福音書の解説を集めた説教集が刊行され、聖職者たちがそれを読むように促されたとき、カルヴァンが説教と朗読を区別し、「自分の痛いところを突かれたと思うように、民衆を教え導くこと」を望むとしたと指摘している。実際に聞けなかった説教の出版を人々は歓迎したし、その読書は、印刷物から刺激を受けて自らを振り返ることを可能にした。余白への書き込みは、書物とのそうした対話の痕跡であった(シャルティエ, カヴァッロ, 2000, p.320, pp.276-277)。

以上のように、ピューリタンの読書行為は、そのアイデンティティの確立や信仰の深まりへの要請に根付くものであり、個別に行われた側面と、共同に行われた側面があった。

## 5. 死の物語における子どもと大人の宗教的読書

ピューリタンの大人の読書行為が、このように個人的かつ共同的に行われていたとすれば、子どもたちの生活や読書は、どのように行われることを想定されていたのだろうか。『*A Token for Children*』や、『*Early Piety*』の読者に向けた前書きでは、子どもたちに読書を勧めているし、White も本文中に殉教物語などを読むように勧めている。Russel も子ども読者に向けた前書きで、読み、瞑想しなさいと記

しているし、『*A Token for Children*』の第8例の少年は、目を悪くしたために医師に止められてもなお、聖書を読もうとする姿が描かれる (Janeway, 1676, part 2, p.73)。読むことが子どもたちの信仰を支える重要な要素であり、「面白くて啓発的」なものであるという認識が、子どものための死の物語の出版を後押ししていたと捉えることができる (Arends, 1708, 'To the British Reader')。

Cambers の指摘するように、ピューリタンの母親が子どもとともにクローゼットに入って読むことを教えていたとすれば、子どもたちの読む行為は、共同的な行為として開始したといえる。そのなかで、物語のなかの死にゆく子どもたち、および読者としての子どもたちに期待された読書と祈りは、どのような行為として捉えられるだろうか。

第一に、大人と子どもは物理的に共同で読書を行う。例えば『*A Token for Children*』の第2例の少年は、「神の言葉が語られるのも、読まれるのも、聞くのが好きだった」だけでなく、「本を読むのが楽しくて、母親に、今日は素敵なお話を習って来たから、本を取って来てお母さんに聞かせてあげると言った」とされている (Janeway, 1676, part 1, p.20)。物語のなかの死にゆく子どもたちは、独りで聖書を読んだり、祈ったり、自身の罪や死後のことを考えて泣くこともあるが、それは孤独な読書と祈りが支配的であったことを意味するとは限らない。なぜならこうした姿は、教育によって導かれた後に、クローゼットから離れて自律的信仰に踏み込むことによって起こったことだからだ。

第二に、母と子どもが宗教的読書を行うことが、文字を読むという行為自体にとどまらないことは想像に難くない。なぜなら、読むことは、書物と対話し、考え、自身の感情や感覚、心のなかを覗き込むことであるから、読みを学ぶことは、単に文字を学ぶことではなく、子どもと大人が話し、対話することであり、祈りや書くことを伴う。Janeway が描く子どもたちも、大人の話聞き、質問を出し、対話を試みる。たとえば彼は、第6例の少年の成長を表わすのに、「著者の友人が祈ったり、読んだり、説教を解説したり、繰り返したりすると、彼は注意深く聞き、神の真理を受け入れる準備ができていよう

だった」と説明し、また「良い質問をする」子どもになったことも評価している (Janeway, 1676, part 1, p.52)。『*A Little Book for Little Children*』の第三話の少年も、母親に対して「天国や神に関する奇妙な質問」をするし、第四話の少年は姉妹に対して、「神を信じているか、神を愛しているか」と尋ね、「もし神を求めるなら、神はあなたを見つけてくださるし、もし神を見捨てるなら神もあなたを見捨てるだろう」と話す (White, 1702, p.72, p.74)。これはもちろん、宗教に関心を持つ子どもの理想の姿を描いたものであるが、少なくともその姿が、個人的な読書のなかで個人的な信仰を深めるのではなく、家族や友人との間で交わされる会話のなかで信仰心が育つものとして描かれているということが出来る。

第三に、死にゆく子どもの物語において、子どもたちは、読みを教わるだけでなく、能動的に語り、対話する存在として描かれる。『*Early Piety*』では、死の床にある Christlieb の周囲にきょうだいたちや訪問していた子どもが集まり、聖歌を読み、歌うという描写がある (Arends, 1708, p.39)。彼は、預言だけでなく、聖歌、祈り、詩編に関する瞑想の文書、教師や姉妹、友人にあてた手紙などを残している。このことは、死にゆく子どもが、単に大人と共に読み、祈るように教育される対象として捉えられているのではないことを示している。むしろ彼らは、多様な語りや対話を通して、宗教的成熟を果たしていくと想定されていたのである。

子どもたちの能動性や有能さは、大人に質問したり教えられたりするだけでなく、大人を諭したり、驚かせたり、治療の選択に関与したり、大人を慰めたりするかたちで発揮された。たとえば『*A Token for Children*』の第12例の少女は、父親に「医者と呼んでほしいか」と聞かれ、「天国の医者連れてきてください、彼だけが私の助けになる」と言う (Janeway, 1676, part 2, p.36)。また Mary Warren も、心配する母に対して、医者も膏薬も拒否し、「神が私の医者で、彼が私を癒してくれる」と母親を頼む (Jessey, and Chear, 1673, p.12)。Martha Hatfield も、同様に飲食を拒否し、「欲しいものはキリストです」と言う (Fisher, 1656, p.10)。こうした態度は、キリストのみにおいて救われるという信仰

を深め、それに身を委ねることを大人に示す。

また子どもたちは自身の死後のことを、特に母親が悲しむことを心配し、嘆かないように伝える。たとえば Jabez は母が「私の子どもは死んでしまう。もう二度と会えない」と嘆くとき、「主を思い出して、落ち着いて」と慰める (Russel, p.5)。

第四に、共同的な読書行為は、子どもや大人の共感を醸成するものとしても捉えられていた。Cambers が用いた Elizabeth Isham (1609-1654) の例は、共同的な宗教的読書のありようの一端を示している。具合の悪い母のベッドの傍で祖母が宗教の本を読んださい「神の前で共に喜びに満ちた」とされ、その時 Elizabeth は「読むことは、精神の（あるいは信仰の (spiritual)）病の症状を軽減する」と学ぶのである (Cambers, 2011, p.65)。

第五に、このような共同的な読書実践のなかで、子どもたちはピューリタンの宗教実践を身につけること、すなわち感情を表現し、信仰を深めることも求められた。『*A Token for Children*』の第2例の少年は、家族で共にする祈りでは満足せず、自分で祈ったとされている。そして、祈るときには「苦しいすすり泣き」をし、聖書が読めるようになると、「涙とむせび泣きで読めなくなるまで大声で読んだ」と記述されている (Janeway, part 1, pp.20-21)。本を読み、自らの信仰の状態に気を配り、結果としての苦しみを表出するというこの行為は、ピューリタンの宗教実践を踏襲するものであった。しかし子どもたちは、こうした辛さと独りで向き合うわけではない。彼らはしばしば、両親に、ともに祈ってくれと頼む。祈ることや読むことは、時に医療に匹敵するものであり、それは治療の効果が期待されたとしても、あるいは死に向かう準備を支えるものだとしても、子どもを支える共同的な行為として行われた。

ところで、死にゆく子どもたちの物語の主題は、こうした共同的行為としての対話、読書、祈りを通じて死の準備を行うことのみが焦点化され、病気の種類や病状の悪化、死の兆候などへの言及や、治療への意志などは、現代人の眼からは不自然に映るほど、殆ど言及されない。たとえば『*A Token for Children*』において、13人の子どものうち、具体的な病気の進行について記述があるのは、わずか

4人である。そのうち1名は「肺の静脈が破れたと推測される」こと、1名は「不調 (Distemper)」<sup>14)</sup>、2名が「ペスト」(Janeway, 1676, part 1, p.5, part 2, p.12, p.25.)、その他の子どもたちが死に至る病に陥ることは「病氣 (sick)」<sup>15)</sup>と表現されており、具体的には「熱」「痛み」などの症状があることが記述されている。全体的にみて、子どもたちの死に至る過程の記述において、病状や治癒への言及は著しく少なく、信仰を深めて霊的な準備を行うことに関する描写の比重が高い。子どもたちの姿も、上述のように、医者や薬、飲食などを拒否して祈りを唱えたり、医者の助言を無視して読書をしたりして、死の準備に勤しむものとして描かれる。

しかしこうした子どもたちの姿を、同時代の人々の死に向かう姿を映したものとして捉えることには、誤謬があるだろう。乳幼児死亡率が高かった17世紀後半において、人々が子どもの病気の治癒に対する期待をどの程度持ち、そのための医療実践をどの程度有効に行っていたかを明らかにするためには稿を改めなければならないが、少なくとも人々が、病や怪我の治癒のための何らかの対処を行っていたということはできる。Newtonは、16世紀後半から18世紀前半にかけての病氣や怪我をした子どもへの対処や態度、考え方等に関する歴史研究のなかで、身体症状に対する処方について書かれた医学や薬に関する文献を手がかりに、処方の割合を調べている。それによれば半数以上の51.66%のケースで内服薬を処方し、さらに外用薬の処方が28.42%であった。これは実際の処方の割合ではないけれども、合わせて7割以上の病氣には、何らかの医学的な手立てが行われるはずだったことになる (Newton, 2012, p.76)。このことを考慮すれば、子どものための死の物語は、そうした医療や治癒への関心を度外視して、

専ら読者の子どもたちの宗教教育に焦点を当てたものだったということができる。

そのように焦点化された子どもの信仰への道筋は、以下の構造を持っているとまとめられる。まず、ピューリタンの大人の宗教実践において、本を参照しながら自分の心や感覚、感情の状態を顧みるといふ要素が重要であることと同様に、死にゆく子どもの物語の登場人物たちも、穏やかな感受性を持ち、罪を十分に感じ取り、神にすべてを委ねる覚悟を固めていく。しかしそれは個人的な営為だけでなく、多分に共同的な読書と祈り、歌、対話などによって支えられている。また、死にゆく子どもたちの能動性は、信仰の深まりへと向って行くかたちでしか表現されないが、それに対して驚きや嘆きを交えながら、大人や家族が彼らを見守り支えるかたちで、彼らの死の準備が行われることが理想だったことがわかる。そうした営為を支えられ、専ら信仰の深まりを目指すことが、現代人にとっては一見不可解に見える「心楽しい」「幸せな」「勝利の」死を保障する道筋と想定されていたのである。

## 6. おわりに—子どもの死の物語における教育可能性の広がり—

『A Token for Children』は、13人の登場人物のうち、最初から驚くべき敬虔さを持ち合わせているわけではない子どもを2人含んでいる。また多くの子どもたちは、信仰が十分でなく、救済の確信が得られないことについて、不安を訴える。預言者としての子どもの様子を証言する記録と同様の啓示を受ける子どもたちも含まれているけれども、全体としては、世俗の、普通の、すべての子どもたちが宗教教育によって信仰を深めることができるという可能性を示唆する物語群となっている。

当時子どものために書かれた子どもの死の物語は、同様に子どもたちの信仰の過程における葛藤を描き出し、最終的な信仰と幸福な死を描き出した。これらが単に理想的な子どもたちを描いていたとしても、子どもの死の物語は、敬虔な子どもたちの奇跡を強調するように書かれたのではなく、子どもたちの信仰を可能にするための装置として、家族や隣

14) この語は、不調や、粘膜に症状が出る病氣一般を表わし、病氣の種類や原因を特定できる語ではない。しかし、18世紀には「喉のジステンパー (throat-distemper)」が死を招く病と呼ばれたり、「ヒステリー」や「妄想」と熱を伴う「致命的なジステンパー (fatal distemper)」という表現があったりすることから、何らかの深刻な不調を意味することばかりである (Craighton, 1894, p.67, p.690)。

15) この語は、病氣になるという一般的な意味もあるが、17世紀には吐き気や嘔吐を特に意味するケースも多かった (McMains, 2015, p.65)。

人たちとの関係的で共同的な読書と祈り、対話が織り込まれていた。子どもたちは、ピューリタン文化を背景として、感情を表出し、自らを振り返り、教えられるが、それだけでなくこの共同的な装置のなかで、時に能動的に他者に語りかけ、働きかけ、対話を通して信仰を深めていくものとして描かれた。

この子どもと大人の共同性は、特別に敬虔な、殉教者のような子どもたちではなく、普通の平信徒の子どもである読者へと、教育の可能性を広げるものだった。彼らの理想的な日常の信仰実践と読書実践が、子どもたちを信仰へといざなう鍵だったのである。

一方で、敬虔な子どもの姿を文字で伝達することは、こうした読書実践や宗教実践を後景におしやり、矛盾や葛藤よりも結果を強調する。Janeway が社会的な関係の描写を控えていたとする Houlbrooke の指摘や、一見単調な敬虔さと死の物語構造は、そこに起因する。つまり、多くの子どもたちに対して、個々の子どもの生活経験に関わらず、死について伝え、生き方について教えようとするテキストは、伝達や学びのプロセスの重要性から目を逸らさせてしまい、書き手や大人が伝達したい、あるいは子どもに獲得してもらいたい内容だけを強調することになってしまったのである。

なお、この点は、現代社会におけるいのちの教育のあり方に関わる問題でもある。子どもたちにいのちの大切さや畏敬の念について伝達することは、今日、教育への社会的な要請であり、学習指導要領にも盛り込まれている。かつていのちや死、存在への理解は、宗教や伝承が担う領域であった。そこでは、存在に関する物語的な理解が社会に共有され、行事や語りによって断続的に提供されることで、個々人の経験や気づきがそこに重ねられた。しかし、いのちについて教える責任を、教育や保育の現場が負うと、個々人の学びや気づきの契機や過程が尊重されることが困難になる。教育や保育においては、多くの場合、一斉にかつ一時的に学びの機会が設けられてしまうからである。子どもたちがいのちや世界について深く考えたり、感じたりする契機は、子どもたち自身の生活経験と深く根ざしている。大人がその生活現実に沿い、子どもの感情や思考によりそっ

て子どもの学びの過程を組織し、子どもと大人が悲しみや驚き、感動や智恵を共有し、それについて対話し、ともに創造するような過程を通るのでなければ、大人が伝達したい「いのちの大切さ」がことばのうでで伝達されるにとどまらざるをえない。広く教育や保育、あるいは対人援助における人間関係のなかで、そうした相互的で対話的な関係と過程の軽視が起り得るが、いのちの教育に関しては、子どもの本の端緒にあたる17世紀の死の物語のテキスト群において、そうした関係と過程を軽視した痕跡を見出すことができるのである。

## 引用文献

- 秋山麻実「17世紀イングランドの子どもの死の物語—James Janeway, A Token for Childrenをめぐって—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第12巻, 2011年3月
- 秋山麻実「17世紀イングランドの教科書の展開と子どもの死の物語」『山梨大学教育人間科学部紀要』第15巻, 2014年3月
- 秋山麻実「17世紀後期イングランドの児童書における子どもの死と宗教的早熟」『幼児教育史研究』第11号, 2016年11月
- 川分圭子『ボディントン家とイギリス近代—ロンドン貿易商1580-1941—』京都大学出版会, 2017年
- ロジェ・シャルティエ, グリエルモ・カヴァッロ『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』大修館書店, 2000年
- 那須敬「情念—プロテスタント殉教ナラティブと身体—」伊藤剛史, 後藤はる美『痛みと感情のイギリス史』, 2017年
- 三宅興子『イギリスの絵本の歴史』岩崎美術社, 1995年
- 米村泰明「「目に見える」罪と罰—「悪弊の解剖」と衣服・演劇」服藤早苗, 赤坂俊一編『罪と罰の文化誌』森話社, 2009年
- Anon., *The Living Words of a Dying Child: Being a True Relation of Some Part of the Words that Came forth, and Were Spoken by Joseph Briggins on his Death Bed*, 1677.
- Arends, W. E., *Early Piety Recommended in the Life and Death of Christlieb Leberecht von Exter*, London, J. Downing in Bartholomew Close near West-Smithfield, 1708.
- Avery, G., and Briggs, J., *Children and Their Books: A Celebration of the Work of Iona and Peter Opie*, Clarendon Press, 1989.
- Cambers, A., *Godly Reading: Print, Manuscript and*

- Puritanism in England, 1580-1720*, Cambridge University Press, 2011.
- Craighton, C., *A History of Epidemics in Britain*, part 2, Cambridge University Press, 1894.
- Fisher, J., *The Wise Virgin: or, A Wonderful Narration of the Various Dispensations of God towards a Childe of Eleven Years of Age Wherein as his Severity Hath Appeared in Afflicting*, John Rothwell at the Fountain in Cheapside, 1656.
- Gouge, R., *The Faith of Dying Jacob, or, God's Presence with the Death of his Eminent Servants*, 1688.
- Green, I., *Print and Protestantism in Early Modern England*, Oxford University Press, 2000.
- Houlbrooke, R., Death in Childhood: the Practice of the 'Good Death' in James Janeway's 'A Token for Children,' Fletcher, A., Hussey, S. (eds.), *Childhood in Question: Children, Parents and the State*, Manchester University Press, 1999.
- Janeway, J., *A Murderer Punished and Pardoned, or, A True Relation of the Wicked Life and Shameful-Happy Death of Thomas Savage*, London, 1668.
- Janeway, J., *A Token for Children: Being an Exact Account of Conversion, Holy and Exemplary Lives, and Joyful Deaths, of Several Young Children*, Printed for Dorman Newman at the Kings Arms at the corner of Grocers Alley in the Poultry, 1676.
- Jessey, H. and Chear, A., *A Looking-Glass for Children*, R. Boulter, 1673.
- Marks, S.K., *Writing for the Rising Generation British Fiction for Young People 1672-1839*, University of Victoria Department of English, 2003.
- McMains, H.F., *The Death of Oliver Cromwell*, University Press of Kentucky, 2015.
- Newton H., *The Sick Child in Early Modern England, 1580-1720*, Oxford University Press, 2012.
- Russel, W., *The Life and Death of Jabez- Eliezer Russel, Son to William Russel, in the Parish of St. Bartholomew the Great*, London, 1672.
- Ryrie, A., *Being Protestant in Reformation Britain*, Oxford University Press, 2013.
- Ryrie, A., Facing Childhood Death in English Protestant Spirituality, Barclay, K. Reynolds, K., Rawnsley, C. (eds.), *Death, Emotion and Childhood in Premodern Europe*, Palgrave, 2017.
- Seguin, C. M., Addicted unto Piety: Catholic Women in England, 1590-1690, Dissertation submitted in partial fulfillment of the requirements for Ph. D in the Department of History in the Graduate School of Duke University, 1997. UMI Dissertation Services.
- Smith, N., A Child Prophet: Martha Hatfield as The Wise Virgin, Avery, G., and Briggs, J., *Children and Their Books: A Celebration of the Work of Iona and Peter Opie*, Clarendon Press, 1989
- White, T., *A Little Book for Little Children*, 12<sup>th</sup> edition, Printed for Tho. Parkhurst, at the Bible and Three Crowns in Cheapside, 1702. (1<sup>st</sup> edition, 1660)
- Whitmer, K. J., Model Children and Pious Desire in Early Enlightenment Philanthropy, Jarzebowski C. and Safley, T. M. (eds.), *Childhood and Emotion: Across Cultures 1450-1800*, Routledge, 2014.

(2017. 11. 20 受稿) (2018. 1. 9 受理)  
(ホームページ掲載 2018年3月)